修正が必要で，その方法によって，口腔清掃性と顎補綴の安定性に差が出ることが予想された。それらは相反する傾向があり，骨欠損部の形態修正の仕方によって，どちらかを優先せざるを得ず，苦慮している。

症例展示１）マルチブラケット装置で治療した２症例

○松山　仁昭，福井　和徳，氷室 利彦
（奥羽大・歯・成長発育歯）

【第１症例】17歳７か月 女性(主訴)前歯の乱れ(所見)上下口唇が突出し，オトガイの緊張を認めた。骨格系に問題はなく，上顎前歯は唇側傾斜していた。大臼歯関係は左右側Angle Class Ⅲであった。正中線は右側に２mm変位していた。

【診　断】上顎前歯の唇側傾斜をともなう叢生(治療）マルチブラケット法を選択し，抜歯部位は上下両側第一小臼歯であった。リンガルアーチによる加強固定を使用し，犬歯の遠心移動後に，上下顎前歯の遠心移動を行い，緊密な咬合を確立した。

【結　果】骨格系に変化はなく，歯系では上顎前歯の唇側傾斜が改善された。顔貌では，オトガイ部緊張感，口唇の突出感が改善された。大臼歯はAngle Class Ⅰとなり，正中線は一致した。

【考　察】術後のパノラマX線写真から下顎前歯部歯軸に右側遠心傾斜が認められ，アップライトとパラレリングが不十分であった。口元の突出感は改善し，オトガイの緊張も和らいだと考える。

【第２症例】10歳８か月 女児

【主　訴】受け口

【所　見】側貌はストレートタイプ,口角が下がっている。下顎骨が大きい傾向であり，上下顎前歯は舌側傾斜していた。大臼歯関係は左右側Angle Class Ⅰであった。

【診　断】前歯部反対咬合

【治　療】Ⅰ期治療では，切歯斜面板により前歯部被蓋が改善された。拡大床による歯列の拡大を行ったが，上顎側切歯は被蓋が逆に戻った。二期治療では，前方部を拡大し，上顎側切歯の被蓋を改善し，非抜歯で排列した。

【結　果】被蓋，舌側傾斜が改善された。歯列の正中線は一致した。

【考　察】マルチブラケット法の診断は，抜歯法であったが，保護者の希望で非抜歯を選択し，口もとの突出に対する改善が十分に得られなかったと考える。前歯部反対咬合は，機能的反対咬合と判断し，約３か月で被蓋改善している。

症例展示２）プリアジャステッドアプライアンスで治療した叢生の２症例

○竜　　立雄，福井　和徳，氷室　利彦
（奥羽大・歯・成長発育歯・矯正学分野）

【症例１】上顎右側第二大臼歯の欠損を伴う著しい上下顎叢生症例

【初診時年齢，性別】20歳１か月，女性

【主　訴】叢生，犬歯の突出

【診　断】上下顎叢生

【顔貌所見】側面:下顎の前突感を認める。正面:下顎が右側へ偏位。

【骨格系所見】側面：Ⅲ級傾向を認める。下顎枝は前方傾斜し，下顎角は大きい。正面：下顎が右側へ偏位し，非対称を認める。

【歯系所見】大臼歯関係:Angle Ⅲ級，歯軸傾斜:上下顎前歯が唇側傾斜。正中線：顔面正中に対して上顎前歯は一致，下顎前歯は左側へ1.0mm偏位している。

【治療方針】

１．下顎左右側第三大臼歯抜去
２．マルチブラケット装置
　　ナンスのホールディング装置併用
　　上顎左右側第二小臼歯，
　　下顎右側第一小臼歯，左側第二小臼歯抜去
３．保定　上顎左側第三大臼歯抜去

【治療期間】２年４か月

【治療結果】健全歯を残すため，処置歯である上顎左右側第二小臼歯，下顎右側第一小臼歯，左側第二小臼歯抜去を適用した結果，アーチレングスディスクレパンシーの解消，上下顎歯軸傾斜の改善を達成し，正被蓋を獲得した。また，欠損していた上顎右側第二大臼歯のかわりに第三大臼歯を誘導し，咬合に加えることができた。

【症例２】上下顎叢生症例

【初診時年齢，性別】11歳１か月，女性

【主　訴】八重歯，歯ならび